
世界を巡る錬鉄の吸血姫 ～【異世界に迷い込んだ少女編】～

贋作者.偽者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を巡る錬鉄の吸血姫 ～【異世界に迷い込んだ少女編】～

【Nコード】

N1036P

【作者名】

贗作者・偽者

【あらすじ】

魔物が蔓延る剣と魔法の世界、ソフィア

その世界のとある森で暮らしていた世界を巡る吸血姫、ユウナ＝H
＝B＝エミヤはある日一人の少女と出会った。

現代の日本で暮らす少女、神崎理緒は突如異世界に迷い込み一人の吸血鬼と出会った。

これはその二人が織り成す一つの物語。

二次創作ですがほぼ一次創作として書きます。

ブログ side ユウナ（前書き）

この作品は、作者が思いつきで書いた作品です。

そのため更新がかなり不定期になると思います。

それでもよい方は読んで見てください。

プロローグ side ユウナ

俺がこの世界に来てから一年、絶壁の崖と海に囲まれ一種の閉鎖空間とかした森で一人暮らしていた。

まあ、この世界に来たときに出た場所がここだったのと、この場所が案外過ごし易かったただけだが。

そのおかげで、この世界の人間に会ったことがない。

20キロくらいまでなら見えるので町や村を見てこの世界がどのような世界かは把握している。

もつとも、面倒なので町や村に行った事はないが

それにここは海からは潮の流れで来ることが出来ず、崖の高さも人が降りれる高さではないので人が来ることもない。

空からの交通手段らしきものの飛行船？もここには下りれる場所がないので同じく。

魔術らしきものもこの世界にはあるようだが、空を飛んでいる人を見たこともないので空を飛ぶことは出来ないか使い手が少ないのだろう。

俺は、崖を上がれるからいつでもここを出れるが、あとは言わなくても良いだろ。

そんなこんなで、今日もいつも通り過ごしていると突然森に発生し

た空間の歪みを察知した。

『誰かが転移でもしてきたか？面倒なことにならなきゃいいが』

もつとも面倒なのでそのまま放置したが

そしてその夜、俺は拠点である洞窟の前で秋刀魚らしき魚を焼いていると（もちろん、七輪で）少し離れた場所から人の気配がした。

その人物はこちらに向かって来るようだ。

そして、近くの茂みから現れたのは、どこかの学校の制服を着た16、7歳位の少女だった。

??「あっ!!」

『ん?』

これが私と彼女の出会いであり物語の始まりだった。

ブログ side ユウナ（後書き）

ご意見、感想などがありましたら気軽に書いてください。

感想はユーザー登録してなくても書くことができます。

応援よろしくお願いします。

ブログ side 理緒

終業式が終わり、今日から夏休み

私は、友達と夏休みの予定を電話で話しながら家に帰っていた。

なんの変哲の無いどこにでもあるような平穏な日常、ちょっとオタクな友達がいたりしてそんな友達とショッピングに行ったりカラオケに行ったりする。

そんな日常がいつまでも続くと思っていた。

しかし、その日常は突然、音もなく崩れた。

突如、友達と話せなくなり、携帯を見ると圏外になっていた。

『えっ、なんで』

今の時代、街の中で圏外になることはない。

周りを見てみるとそこは森の中。

『うそ、ここに』

私が暮らしている街にこのような森は無かったはず。

とりあえず、人がいないかと思い散策をはじめた。

この時、私はドッキリか誘拐だろうとたかをくくってました。

しかし捜せど誰も見つからず森の周りが海と崖に囲まれてることだけが分かった。

そして、絶望的な状況のまま夜になり心が折れようとした時、魚の焼けるいい匂いがしてきた。

『いい匂い、ってことは人』

私がすぐさま周りを見わたすと少し離れた所が明るく煙が出ているのが見えた。

すぐさま、その場所へ向かうとそこには、友達に無理矢理観させられた映画、Fateなんかに出ていた赤い外套を着た弓兵のコスプレ（だと思う）をした私と同じくらいの少年が七輪で秋刀魚を焼いてる所だった。

『あっ！！』

??「ん？」

これが、私と彼女の出会いであり物語の始まりだった。

ブログ side 理緒（後書き）

ご意見、感想などがありましたら気軽に書いてください。

感想はユーザー登録してなくても書くことができます。

応援よろしくお願いします。

主人公（前書き）

主人公達の設定です。

たぶん読まなくても問題ありません。

主人公

ユウナ^{ひなもりプリュンスタッド} H B エミヤ

ユウナはこの作品のみの設定を記載、シリーズ共通の設定は世界を巡る錬鉄の吸血姫シリーズ 主人公の設定の主人公設定を参照
タイトルの上の世界を巡る錬鉄の吸血姫シリーズからいけます

性別 基本は男性（途中から理緒の前では女性）

神崎^{かんざき} 理緒^{りお}

性別 女性

年齢 18歳

髪色 黒

目色 茶

髪長さ 胸あたりまでのストレート

服装 遠坂凜と同じような服装

好きなもの・得意なこと 家族、食べること、可愛いもの、剣術など
嫌いなもの・苦手なこと 人を見下す人、虫、強面の人など

性格 気が強い、ツンデレ、天然（本人無自覚）

偶然異世界に迷い込んだ少女

適応能力が高く摩訶不思議なことにもすぐに順応する

実家が剣術の道場なので剣術の心得がある

日本人なのになぜか西洋の剣の道場だが

何気にそこそこ強い

頭の回転が早く、結構鋭いのだが天然なので少しずれたことを言うことがある。

友達にオタクがいる影響か、時々ネタに走ったり、漫画やアニメなどの技を真似ることがある。

ただ本人は元ネタを知らず、それによってもたらされる被害も知らない。

スタイル抜群で、頭もよく、剣や魔法の才能もありその才能をユウナから羨ましがられているが本人はユウナの方が才能が有ると思っている。

主人公（後書き）

紹介してほしいキャラ、登場させてみてほしいキャラがいましたら感想に書いてみてください。

出来る限りやってみます。

ご意見、感想、応援よろしくお願いします。

第1話 出会い（前書き）

本編の始まりです。

視点がコロコロ変わります。

第1話 出会い

side ヌウヤ

少女が声をあげると

グ

なんとも可愛らしいお腹の音が聞こえた。

『クツクツク、こっちに來いよ、飯くらい食わせてやるよ』

理緒「あ、ありがとう」

恥ずかしかったのか少し顔を赤らめながら、俺の向かい側に座った。

『ほらよ、醤油はないが我慢してくれ』

そう言っていい感じに焼けた秋刀魚？と大根おろしを渡す。

よほど腹が減っていたのか一心不乱に食べ始めた。

そんな彼女をしばらく見ているとどうやらこちらに気づいたようだ。

理緒「なに？」

『なに、感想を聞こうと思ったが、その様子だと聞くまでも無いと思っ
てな』

理緒「なっ」

結構からかいがあるな。

side out

side 理緒

こいつ絶対性格悪いわね。

そんなことを思いながら秋刀魚を食べた。

なんとか食べ終えた後、目の前のコスプレ少年にいろいろ聞いてみることにした。

『ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど』

ユウヤ「なんだ？」

『あんたが、あたしを連れてきたの』

ユウヤ「？、何のことだ？」

『知らないなら良いわ』

ユウヤ「？」

『ねえ、ここは、どこ?』

ユウヤ「さあ、知らん」

知らないって

『ちよっ・・・いいわ』

なんか、嫌味で返されそうだし

『じゃあ、ここにあんた以外の人はいるの?』

ユウヤ「いないな、海を渡るか崖を登って森を出れば町には行けるが、まず無理だな」

『そんな』

s i d e o u t

s i d e ユウヤ

彼女はここから出られないと知ると・・・いや、あの感じは改めて突きつけられたってところか

『落ち込んでる所悪いが一つ聞きたい。』

ここは、人が来るところじゃないし、来れる所でもねえ、あんたどうやって来た？』

??「そんなの知らないわよ、気づいたらここにいたんだから」

嘘は言っていないようだな

ということとは、あの空間の歪みはそういうことか

『なるほどな』

??「なによ」

『いや、迷子とは思っていたが、まさかなんと壮大な迷子とは思って無くてな』

??「迷子、ね」

あれっ？ちよつとからかいすぎたか？それにしてもこいつについて行ったら面白そうだし、いい暇つぶしが出来そうだ。

最近暇だったんだよな、そろそろ、町に行こうと思っていたし、丁度いいか

『なんなら、町に連れて行ってやろうか』

??「マジ！」

『ああ、どこから来たのか知らんが、帰るにしてもまずは町へ行か

ないと始まらないからな。

ただし、俺もあんたの旅に同行させてもらっぜ、あんたといると退屈しなくて済みそうだからな。

さて、どうする?。」

s i d e E N D

s i d e 理緒

はつきり言ってかなり魅力的な話だ。

コスプレ少年が着いて来るのはあれだけど、正直こんな得体の知れない所を一人で行けそうに無い。

『お願い』

? ? 「決まりだな、これかな一緒に旅をするんだ自己紹介くらいしようか。」

俺は、ユウヤ、ユウヤ＝H＝B＝エミヤだ。

ユウヤと呼んでくれ」

『神崎理緒、よろしく』

後に、私はこの出会いに感謝するんだけどそれは別の話。

私とコスプレ少年もといユウヤが町へ向かうことが決まると今日はもう休めと言われて彼の拠点の洞窟へ入った。

拠点の中はランプがあり明るかった。

周りを見ると、物がほとんど無かった。

私はふと、置いてあった布団とその反対側にある武器の山が気になった。

ユウヤ「今日はここで寝てくれ」

そう言ってユウヤは私が見ていた布団を指差す。

『ねえ、あの武器は何？』

ユウヤ「ん？、ああ、あれは俺が鍛《う》った武器だ」

『あんた武器作れるんだ』

ユウヤ「趣味の一つだ」

武器作りが趣味って捕まるんじゃない、あつここに人は来ないわね。

ユウヤ「それと明日旅立つ前にあの中から使う武器決めてもらっから」

『はあ？なんでよ』

ユウヤ「ここはいないが崖を越えれば魔物がいるからな、丸腰で行ったら死に行く様なものだ」

『わ、分かった』

なんでそんなのがいるのよ

s i d e E N D

s i d e ユウヤ

そんなあからさまに落胆するなよ

『それより、早く寝ろ』

理緒「あんたは？」

『明日の準備、それが終わったら休む』

理緒「手、出さないでよね」

『誰が出すか』

そのぐらい元気があれば大丈夫か

理緒「お休み」

『ああ、お休み』

余程疲れていたのか、理緒は一分もしないうちに寝た

『へえ、寝顔は結構可愛いな、それにしても災難だな、偶然にも世界の歪みに入るなんて、帰れる可能性は0じゃないが、絶望的だ。

どうするか楽しみだな。

精々愉しませてくれ、理緒』

準備と言っても工房とか鍛冶場を片付けるだけだし、ちゃっちゃんと片付けるか

『ん？』

片付けが終わり休もうとしたとき、ふと理緒の事が気になった。

『泣いてやがる、当然かいきなりこんなことになったんだもんな。

ここで出会ったのもなんかの縁だろうし

楽しませて貰うんだ、壊れないようにはしてやるか。

お休み理緒』

俺が頭を撫でると理緒が笑ったような気がした。

s
i
d
e

E
N
D

第1話 出会い（後書き）

ご意見、感想などがありましたら気軽に書いてください。

感想はユーザー登録してなくても書くことができます。

応援よろしくお願いします。

第2話 旅立ち（前書き）

旅の始まり、主人公達の旅はどうなるのでしょうか

第2話 旅立ち

side 理緒

目が覚めるとそこには、岩の天井が広がっていた

『夢じゃ無かったんだ』

夢じゃないのに、なんかあつさりしてるなあ私

ユウヤ「起きたか、早く飯食え」

もう少し優しくしてくれても良いんじゃない

『はい、はい』

眠たい目を擦りながら外へ出ると少し野菜の入ったスープと何かのステーキが用意してあった。

というか鍋とかフライパンとかどうしたの？昨日の拠点の中には無かったはずだけど

とりあえず、準備されたスープとステーキを食べ始めた。

『ご馳走さま』

うん、すごく美味しかった、昨日も思ったけど、なんでここまで美味しいんだろ？

ユウヤ「お粗末さま、美味かったか？」

『まあまあね』

ユウヤ「その割にはずいぶん食ったな、俺の分が無いんだけど」

『あつー！』

ユウヤ「ククク、良いよ別に、それよりも武器を選べ、決まったら行くぞ」

ユウヤに促されて拠点の中にある武器の山に向かった。

あれっさっきの布団はどこ行った？

いくつかの武器を試してみても一番しっくりきたロングソードを選んだ。

ユウヤ「剣の扱いに慣れてる様だが、なんかやってたのか？」

『別に、家が剣術の道場だから、触れる機会が多かっただけだし』

ユウヤ「なるほど、それにしても珍しいな西洋の剣の道場って」

『そう？小さい頃からあったから疑問に思わなかったけど』

ユウヤ「そっか、ほれっ、鞘だ、入れとけよ」

ユウヤは私に革の鞘を渡すと武器の山をバックに入れ始めた。

あからさまにバックより大きな剣や槍などが次々とバックの中に消えていく。

容量も武器のほうが多いのに、バックには一切の変化が見られなかった。

どうなってるの？

聞いてみても、はぐらかされるだけだった。

武器の山が完全に消えると

ユウヤ「行くぞ」

と言ってとつと拠点を出て行った。

外にあった、鍋やフライパンなどはいつの間にか無くなっていた。

たぶん、あのバックに入れたんだろうけど、ついでに布団も。

拠点を出て向かった先は海の反対側に位置する崖だった。

『高っ、どんだけあるのよ』

ユウヤ「約30m、10階建てビルに相当する」

『どっやってここを越えるのよ』

ユウヤ「ああ、それはこうやって」

突然、ユウヤが私を抱きかかえた。

俗に言うお姫様抱っこでだ。

ユウヤ「しゃべるなよ、舌嚙むぞ」

『へっ キヤアアアア〜』

数分後

『ハア、ハア、ハア、死ぬかと思った』

こいつ私をお姫様抱っこしたと思ったら、いきなり跳び上がりやがった。

怖くてついしがみ付いたからこいつの顔が近くにあって恥ずかしかったし

顔整ってて結構かつこ良かったなあ。

ユウヤ「おい、いつまでも惚けて無いで行くぞ」

『あっ、うんってあんたのせいでしょ』

s i d e E N D

s i d e ユウヤ

俺と理緒の旅はトラブルの連続だった。

いや、俺や理緒は何もなかった。

角の生えたウサギや少し大きい狼の魔物が出てきたぐらいで、狩りの経験があつたらしく理緒一人でも十分に対処できた。

動物？とはいえ殺してもケロッとしているのは、現代の女の子としてどうかと思つたがこの先都合が良いので黙っておいた。

問題は

理緒「あつ、またいた」

『またかよ！！』

どっかの貴族か王族らしき人達が盗賊や山賊、魔物なんかに襲われているのをよく見つけるのだ。

ときどきどっかの村人だったり、商人だったり、奴隷商人に連れられてたり、連れ去られそうになっている人もいたが

見捨てるのも目覚めが悪いので、見つけた場所から俺が弓で襲っている方を射抜いている。

場所によつては100m位だったり、5km以上離れてたりした。

人は殺していませんよ。

ほつといたら死ぬと思うけど

余りにも多いから途中から自棄になって、理緒に双眼鏡渡して見つけたら教えると言つてた。

助けた内の何人かに知り合いっぽい人とか後十年位したら知り合いにそっくりになりそうなこもいた様な気がするが気のせいだろう。

理緒「ねえ、なんで助けた後逃げるのよ？」

『絶対厄介事が面倒な事になるからだ』

理緒「それって、勘？」

『いや、実体験』

おいつ、なんだその納得って顔は

理緒「そ、それより早く行きましょ」

『ああ』

その後も色々遭つて結局町に着いたのは日が暮れ始めた頃だった。

何でだよ、ありえんだろ10kmくらいの道程で10時間もかかるなんて。

こつして俺と理緒の最初の旅はとんでもない不安を残した。

s i d e E N D

第2話 旅立ち（後書き）

ちなみに10kmを10時間で移動する速度を平均速度に直すと秒速30cmです。

ソフィアでも魔物の出現などによりかなり前後するが10kmの道のりは通常5時間もあれば移動できる。

解説はこのぐらいでそれでは、また次回

ご意見、感想などがありましたら気軽に書いてください。

感想はユーザー登録していなくても書くことができます。

応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1036p/>

世界を巡る錬鉄の吸血姫 ～【異世界に迷い込んだ少女編】～

2011年10月8日03時10分発行